

自分と いうこと



ナルタン

人は、ほとんどの人は、
自分は自分のことを知っていると思っ
ています。
当たり前だ、自分のことなんだから、
自分がいちばんよく知ってるに
きまっている、
ということなのでしょう。
そうでしょうか。
じつは知っているとお勤ちがしている
ことが多いのです。



インナーラビリンス
自分という名の迷宮
著者 ナルタン (日家ふじ子)
OEJ Books / めるくまーる
定価 1,944 円 (税込)

ナルタン (日家ふじ子)

名門英和学院に在学中、高校2年のとき、
当時超難関だった米国財団のテストにパ
スして奨学金を獲得し、ニューヨーク州の
高校に留学。帰国後、東京芸術大学建築
科に入学。卒業後、東洋都市建築研究所
の研究員を経てふたたび渡米。
その後、プリストン大学の建築科教授と結
婚。のちに離婚するが、そのころ OSHO
の講話と出会い渡印、弟子となる

以前、インダのOSHOのワークショップで、
十数人が隔離された部屋で「あなたは誰
か？」という問いを三日間集中的に問いか
けあうグループセッションが行われていま
した。二人一組になって「フウ アーユ
ウ (Who are you?)」と、ときどき相手を
変えながら問いつづけるセッションです。
あなたは誰? と問われて、人はふつう
なんと答うのでしょうか?
まず名前、出身地、仕事、好きな食べも
の、趣味、家族、やりたいこと、行きたい
場所などを語り、あとはおぼろげな將
来像などを語ると、はたと止まって、はじ
めて「えっ、自分で、ほかになにがある?」
と気づきます。そして、そこではじめて自
身の内面に焦点が移っていきます。
この瞬間この地点が、人が自分のことを
じつはよく知っていないことに気がつい
て、もっとよく知りたいと感じる出発点
です。

ところが「ト」はそこからうまくスムーズ
に進んではいきません。たいていの場合、
それ以上深くは踏みこんでいかないので
す。なぜか?

怖いからです。

自分のなかには、なにが隠れているか知
らないからです。

誰もが経験することですが、自分の内側
の奥深いところには、ふだんは知らないよ
うな暗くて嫌な怪物…どす黒い怒りや憎
悪がひそんでいるんじゃないかという恐怖
があるからです。

「自分」は意識を住みかとしていて、そ
の意識は膨大な無意識層のなかの、ほんの
一部でしかありません。ということは、自
分をもっと知りたい人は、この広大で暗い
迷路のような意識のなかに跳びこむほかな
いのです。

加えて、その自己を探求する作業には終

わりはありません。

「へえ、今どき自分探し? はやらない
ね」などと、わかったような口ぶりで自己
探求を揶揄するいわゆるオトナは、真摯に
自分を知ろうとしてこなかった人たちがで
す。気にかける必要はありません。

わたしは最近『インナーラビリンス』と
いう本を出しましたが、これは何年も前に
書いた、わたしなりの自分探しがテーマで
す。

この本は、わたしが、それまで自分だと
思っていた自分はなんだかちがうと気づい
て、その混沌から抜けだすため、旅立つと
ころからはじまっています。そして師OS
HOのもとで恐れおののきながら自らの未
知の世界と出会い、またグループセッシ
ョンのなかで自分の虚構を剥がされていきま
す。

どれもけっして快い経験ではありません

でしたが、自分という迷路迷宮を探るとい
う、わたしがまさに求めていた体験を得た
のでした。

そうです。自分を探し求める行程は、そ
れが真摯であれば、けっして楽しく愉快な
ものではなく、むしろ、苦しく痛い経験に
なることがほとんどですし、また、ひとつ
が終わったからそれで終わりということに
もなりません。そして、おいしい見返りは
なにひとつありませんし、誰かが褒めてく
れるわけでもありません。

あるのは驚きと、感動だけです。
ですが、その驚きと感動の深さには、な
にもものにも代えがたい価値があるのです。